

〈原著論文〉

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の研修受講における キャリア形成の様相

Aspects of career development in attending a training course for Certified Nurses in Stroke Rehabilitation Nursing

登喜 和江¹, 山本 直美², 岩佐 美香³, 山居 輝美⁴
日坂 ゆかり⁵, 杉浦 圭子⁶, 山添 幸⁷

要旨

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の認定看護師研修受講におけるキャリア形成の様相を明らかにすることを目的に、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師10名に半構造化面接を行い、質的記述的方法で分析を行った。結果、認定看護師の研修受講におけるキャリア形成の様相には、研修受講前の動機〈専門性への不足感〉〈成長への機会〉から、研修中の学びを基に〈専門的学びが思考を刺激する〉〈看護を学び直す機会〉を経て〈認定看護師としてのアイデンティティの形成〉、職場復帰後の〈行き来する「不安」と「自信」〉〈自身を奮い立たせる〉〈知識が行動を後押しする〉〈専門性の見通しの不確かさ〉の9カテゴリ、23サブカテゴリが抽出された。参加者は、研修への参加によって職場の課題や自己の課題を見出し、解決の方策を学び取り、自施設への貢献の可能性に期待を抱き、看護実践を通して出現する新たな課題に対峙するというプロセスの中で、力強く成長し続けていた。

To reveal aspects of career development in attending a training course for Certified Nurses in Stroke Rehabilitation Nursing, we conducted semi-structured interviews with 10 certified nurses, with a qualitative descriptive analysis.

Consequently, nine categories and 23 subcategories were extracted regarding the aspects of certified nurses' career development in attending the training course. Their motivations for attending the training were a <lack of expertise> and <opportunity for growth>. Their learning during the training were <specialized learning stimulates thinking>, <opportunity to relearn nursing>, and their <identity formation as a certified nurse>. Their after returning to work were <"anxiety" and "confidence" going back and forth>, <inspiring themselves>, their <knowledge supports actions>, and the <uncertainty of a professional outlook>.

Participants appeared to continue to grow strongly in the following process: they discern their workplace and personal issues by participating in the training; while learning how to overcome the issues, they have high expectations for the possibility of contributing to their workplaces; and they confront new issues that emerge through nursing practice.

キーワード：脳卒中看護，認定看護師，認定看護師教育，キャリア形成

Stroke Nursing, Certified Nurses, Certified nurse education, Career development

1 Kazue TOKI	千里金蘭大学 看護学部 看護学科	受理日：2021年9月2日
2 Naomi YAMAMOTO	佛教大学 保健医療技術学部 看護学科	査読付
3 Mika IWASA	四天王寺大学 看護学部 看護学科	
4 Terumi YAMAI	摂南大学 看護学部 看護学科	
5 Yukari HISAKA	岐阜大学 医学部 看護学科	
6 Keiko SUGIURA	東京都健康長寿医療センター 研究所	
7 Miyuki YAMAZOE	西宮協立脳神経外科病院 看護部	

はじめに

看護師のキャリアアップは、所謂看護管理者としてのラインを歩む選択肢だけであったものが、日本看護協会の資格制度のもと、1995年から特定の看護分野における熟練した看護技術及び知識を有する人材育成として、認定看護師の教育が開始された。日本看護協会が定めた認定看護分野では、2020年12月現在21分野20,721名の認定看護師（日本看護協会, 2020）が誕生し、就業している看護師の1.7%を占め（厚生労働省, 2019）、看護師のキャリア選択の1つとなっている。

こうした中、認定看護師に関する研究では、その活用や活動（福地本ら, 2016; 宮首ら, 2012; 神坂ら, 2010）が多くを占め、キャリア発達に関する研究は、キャリア発達に影響を及ぼす要因や支援体制などについての研究（鈴江, 2018; 吉田ら, 2013; 西村, 2018）であった。

医療の場は、多忙を極めると言われながらも看護師は自らの専門性を追求する様々な研修を受講しており、浅井ら（2012）の調査においても学びの場を求めている看護師が多く存在していた。また、著者らは脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程に携わる中で、受講生の葛藤と成長を目にしてきた。

看護師の介入がその後の回復やQOLにも影響を及ぼす脳卒中分野のリーダー育成を目指し、専門看護学会の期待と要望から2008年に創設された「脳卒中リハビリテーション看護認定看護師」教育制度で、782名（2020年12月現在）の認定看護師が誕生している。認定看護師が捉えるキャリア発達については、内的体験（三輪, 2011）や体験の意味（三輪ら, 2012）を分析した会議録がみられるものの論文化されたものが見当たらず、十分な検討ができずにいる。今回、急性期から維持期までの広範囲の看護を担う脳卒中看護分野の看護師の認定看護師研修の受講動機や研修中、その後の看護実践についての語りから研修体験がスペシャリストのキャリア形成に及ぼす様相がみえるのではないかと考えた。また、本研究によって、看護分野が専門高度化する中で、認定看護師研修による看護職者のキャリア促進のあり方が提案できると考えた。

本研究における「キャリア形成」とは、看護分野における専門的な水準の高い看護実践力を形成していくこと、「認定看護師研修」とは、日本看護協会が認定看護師教育機関と認定した教育機関で

の研修とする。

I. 研究目的

本研究の目的は、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の認定看護師研修受講におけるキャリア形成の様相を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の資格を有して活動している認定看護師の語りから脳卒中分野で働く看護師が専門的な学びに挑戦する動機や研修を通してのキャリア形成の様相を明らかにするために、質的記述的研究デザインを採用した。

2. データ収集

1) データ収集期間

データ収集期間は、2015年9月～2020年1月であった。

2) 研究対象者および選定方法

本研究の対象者は近畿圏内の病院に勤務する脳卒中リハビリテーション看護認定看護師とした。ホームページ上に認定看護師の活動を公表している病院の看護部に研究への協力依頼を行い、承諾の得られた6施設の看護部に対象者の選定を依頼した。

3) データ収集方法

データは、半構造化面接法で収集し、「認定看護師を目指した動機」「研修中に考えていたこと」「認定看護師になってからの変化」「現在の業務内容と役割」「要望」を自由に語ってもらった。また、面接場所は、対象者の所属する施設の面談室や大学の研究室などの個室とした。面接回数は、1回であった。全ての面接内容は、同意を得てICレコーダに録音した。

3. データ分析

データ分析は、分析単位を文脈レベルとする質的な内容分析の手法で行った。録音された面接内容は全て逐語録にした。参加者ごとに逐語録になったローデータから、研修受講の思いが表現されている箇所を抽出した。次に、その箇所の前後の文脈も考慮して意味のまとまりを読み取り、意味内容に共通性のあるものを集め、サブカテゴリ化した。サブカテゴリの解釈段階では表現の抽象度を

上げることなく、できるだけ語りの記述に近づくような表現とした。最後に、サブカテゴリの意味内容の類似性を吟味し、カテゴリ化へと進めた。この分析過程は、認定看護師教育経験者及び脳卒中看護の研究者や認定看護師としての実践家である共同研究者によって、研究者間で解釈の妥当性を検討し、支持できることを確認しながら進めた。

Ⅲ. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する機関の疫学研究倫理審査委員会の承認（通知番号214, K19-022）を得て行った。対象者の脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の選定は、所属施設の看護部に依頼し、紹介を受けた対象者に、研究者が直接連絡を行い、研究の概要を説明し内諾を得た。その後、指定された日時に出向き、研究の趣旨や方法、研究参加への自由意志と撤回権利の保障、不利益の排除、匿名性の確保、個人情報保護とプライバシー保護、データの破棄、研究結果の公表などについて依頼書を用いて口頭で説明し、同意書への署名をもって研究参加への同意を得た。

Ⅳ. 結果

1. 参加者の属性

研究参加者は、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師10名で、全員が女性であった。参加者の看護師臨床経験は、平均18.8（13～26）年、認定看護師歴は、平均4.2（1～6）年で、研修受講時の職位は、スタッフ5名、主任・副師長・師長などの管理職が5名であり、面接時の職位は、スタッフ3名、主任・副師長・師長などの管理職が7名であった。面接時間は、平均57.2（30～90）分であっ

た（表1）。

2. 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の研修受講におけるキャリア形成の様相

参加者の語りには、研修受講を中心とした研修受講前の思い、職場復帰後の思いに時間軸での変化が見られたので、【研修受講前】、【研修中】、【職場復帰後】に分類した。

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の研修受講におけるキャリア形成の様相には、9カテゴリ、23サブカテゴリが抽出された（表2）。以下、各カテゴリの詳細を述べる。なお、カテゴリは《 》、サブカテゴリは〈 〉、ローデータは「斜体（参加者A～J）」で示した。

1) 研修受講前

参加者は、認定看護師研修の受講動機として、看護師としてのジェネラルな経験から専門性の行き詰まりのようなものを感じ、《専門性への不足感》《成長への機会》を語っていた。

(1) 《専門性への不足感》

ここでは、〈自身の看護実践への疑問〉〈専門知識の必要性〉といった、これまでの自身の看護実践を振り返りつつ、看護師としての専門的知識に裏打ちされた高度な知識の必要性を希求して次のように語っていた。

①〈自身の看護実践への疑問〉

「言われるままに組織の中で動いていけるかなっていうところにすごく不安があった（E）」「自分の看護人生こんなんでもいいのかなって……、ただ単に先生に言われるままの、バイタルサインとるのも、先生が3時間っていうから3時間とか、そういう根拠が全くなかった自分の看護になんか不安を抱いて（C）」などの急性期での診療の補助を中心とした自身の行っている看護実践に対する疑問を語っていた。

表1. 参加者の属性

参加者	認定歴（年）	臨床経験（年）	受講前職位	受講後職位	所属施設	面接時間（分）
A	1	13	スタッフ	主任	脳神経外科専門病院	70
B	3	14	スタッフ	—	総合病院	64
C	4	17	主任	—	総合病院	80
D	4	20	スタッフ	—	大学病院	30
E	4	20	師長	—	総合病院	61
F	5	18	スタッフ	主任	総合病院	45
G	5	20	主任	師長	脳神経外科専門病院	57
H	5	23	師長	—	大学病院	45
I	5	26	副師長	—	総合病院	90
J	6	17	スタッフ	—	総合病院	30

表2. 認定看護師研修受講におけるキャリア形成の様相

カテゴリ	サブカテゴリ	(参加者)
専門性への不足感	自身の看護実践への疑問	(C,E)
	専門知識の必要性	(A,B,C,D,E,G,H,I,J)
成長への機会	上司や職場からの勧め	(B,E,F,H,I)
	キャリアアップの手段	(A,C,D,H)
専門的学びが思考を刺激する	職場の改善点に気づく	(A,E,F,G,H,J)
	学びを職場に還元したい	(A,C,E)
	役割や考え方を学ぶ	(D,E,F,J)
看護を学び直す機会	自分の不足を知る	(A,F,G)
	自分を見つめ直す	(A,B,E,F,J)
	本来の看護に気づく	(A,C,H)
認定看護師としてのアイデンティティの形成	認定看護師としての覚悟	(C,E)
行き来する「不安」と「自信」	譲れない看護の専門性	(B,C,I)
	使命感と不安が交差する	(A,C)
自身を奮い立たせる	使命感と焦燥感の狭間で	(A,F,I)
	認知度の低さを思い知らされる	(B,C)
	使命感が背中を押す	(A,B,C,E,H)
	活動を知らしめる	(D,E,G,I)
知識が行動を後押しする	手探りでの活動開始	(B,I,J)
	言葉に説得性を持つ	(D,J)
	研修での学びを活かす	(A,D,E,G,J,H)
専門性の見通しの不確かさ	確証を持って提案する	(A,C,H,I)
	役割継続への漠然とした不安	(B,C,D,E)
	新たな課題が現れる	(H,J)

②<専門知識の必要性>

「自信がないままに毎日やっているっていう感じ……、今の時代に合っているのか、全然わからない状態で毎日過ごしていた (I)」 「もっと知識があって退院指導とかしてあげられたら、もう少し安心して送り出してあげれるんじゃないかなっていう思い (B)」 「悩みながら看護していく中で、もっと自分自身に知識が欲しいとか、もっと学びたい (A)」 などの看護実践を行っていく上で、自身の専門知識の不足感を語り、もっと知識や技術があれば患者や家族に還元できる。もっと勉強したい、極めたいとその必要性を語っていた。

(2) <成長への機会>

ここでは、<上司や職場からの勧め>といった、職場の求めに応じての研修への参加であるもののそれらをチャンスとして捉え、<キャリアアップの手段>などの自身の成長への機会として次のように語っていた。

①<上司や職場からの勧め>

「患者さんがどんどん増えてきて、需要がこれから高まるから、もう一人〔研修に〕行って欲しいと (F)」 「看護局の部長から〔研修に〕行ってみないかって言われた。脳外科の病院なので、絶対いるからって (I)」 と職場の期待を受けて研修受講を決意したことを語っていた。

②<キャリアアップの手段>

「認定看護師の先輩がいましたので、その方を見ながら私もそういうふうに活動したいなって (A)」 「看護として何か専門性を持ったものを学習したい。自分がしたい看護が展開できるかなっていう思い (H)」 などのように現状を打開して、次のステップに進む方策としての受講動機を語っていた。

2) 研修中

職場からの期待と自身への期待から参加した研修で参加者は、学習を進める中で“知”という“力”がついた自信から<職場の改善点に気づく>などの<専門的学びが思考を刺激する>と共に、<自分を見つめ直す>体験などを通して<看護を学び直す機会>と捉えていた。また、そうした体験は<認定看護師としてのアイデンティティの形成>に繋がっていた。

(1) <専門的学びが思考を刺激する>

研修中の学びは、職場に軸足を置いたものであり、常に職場を意識した<職場の改善点に気づく><学びを職場に還元したい>であり、研修後の自身の職場での立ち位置として<役割や考え方を学ぶ>などの研修を通して、その認識が形成される様子を語っていた。

①<職場の改善点に気づく>

「帰ったらSCU (Stroke Care Unit) の基準をつ

くらないといけないとか、勉強会はこういう風にしないといけないとか、うちはまだまだ甘いとか (E)」 「勉強している時に、あっ、こういうことが自分所でできていないなという思いがあって (H)」 「自分の施設で、この部分が不足しているなって、そこを帰ったら改善しなきゃいけない (A)」 などの学びの中で、職場の問題点を見出し、具体的な改善点を考えていた。

②<学びを職場に還元したい>

「習ったこととか、今ここで思っている感じたことをとにかく、早く臨床に返したいと思っていました。半年ずっと (C)」 「常にイメージしているのは、病棟の事で、帰ったら病棟でこんなこと利用できるよとか、こういうやり方で活動していかないといけないとか (E)」 など研修中は、常に職場を意識し、どのように還元できるかを考えていたかが語られた。

③<役割や考え方を学ぶ>

「PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルをどう回すかとか、一人でやっていたらダメで人をどう動かすか、そんなことを学んだ (F)」 「認定看護師は、スタッフ教育というのがすごい求められるんだなって。一般のジェネラリストの看護師と求められるところが違う (D)」 などの認定看護師に求められる教育的役割や周囲を巻き込んだ仕事の仕方などが語られた。

(2) <<看護を学び直す機会>>

研修中の学びには専門的な知識や技術を得るだけに留まらず、自身の看護師としての在り方を振り返る機会でもあり<自分の不足を知る><自分を見つめ直す><本来の看護に気づく>などが語られ、改めて看護を学び直す機会と捉えていた。

①<自分の不足を知る>

「普段わかっているような気がしていたけれど、実はわかっていなかったんだっていうところが明らかになった (A)」 「深くいろんな多方面から見て考えて無かったなって (G)」 など自身の不足していた部分に研修で気づかされたと言っていた。

②<自分を見つめ直す>

「自分の看護を見つめるといって、私ってこんなにできなかったんだっていうのを思い知らされる (B)」 「偉そうになっている部分もあったんだろうなという、自分を知ること、反省する部分が多かった (F)」 「自分の知識だけを相手に押し付けるというところがあった (J)」 など自身の臨床での行動を振り返り、自身の傾向への気づきが語られた。

③<本来の看護に気づく>

「患者さん一人一人に看護があるということを考えさせられた。学び直したっていう発見ができた。患者さんに対する考え方か思いとか、一旦リセットして、『看護』をもう一回学び直した。認定の半年間は、看護漬けの毎日のような… (C)」 「実習で一人の患者さんをじっくり受け持たせて頂いて、普段バツと忙しいとここで、流れていくことが立ち止まって考えることができた (A)」 など、研修期間は看護漬けの毎日と語ったように、看護の原点に立ち返る体験をしていた。

(3) <<認定看護師としてのアイデンティティの形成>>

研修での学びは、認定看護師としての確固たる「アイデンティティ」を形成し、現状の看護の不甲斐なさに対して<認定看護師としての覚悟><譲れない看護の専門性>など厚い思いとして語られた。

①<認定看護師としての覚悟>

「医師が手術を成功させても、その後、合併症とか、そういうことで潰してしまうことも、看護師には責任がかかっているんで、その手術を生かすも殺すもって考えたら、看護師の役割ってすごく大きい (E)」 「もう絶対次は再発させないとか、嚔下性肺炎を起こさないっていう、何かこう強い燃えるものがでた……看護にどれだけ命かけられるかじゃないけど、そういうのが、認定看護師っていう資格というかそういうのを貫いて仕事しているんだったら (C)」 など、認定看護師として働く上での覚悟を語っていた。

②<譲れない看護の専門性>

「口腔ケアを歯科衛生士に頼むなんてことはして欲しくありません。それは看護師がすることですよ (I)」 「誤嚔性肺炎だったりとか、それを予防するポジショニング、肺リハ、嚔下訓練、口腔ケアっていう部分には自信ありますっていうか、負けなと思います (C)」 「生活指導だったら私に任せてみたいなところはあります (B)」 「専従になってしまうと、患者の事が見えない。夜勤とかしながらちゃんと患者の事を見ながら気づいて活動したい。WOC [ナース] (Certified Nurse in Wound, Ostomy and Continence Nursing) とかは、傷を観てカルテ見て実践できるかもしれませんが、脳卒中中の認定は、患者の生活を通してみることだと思う (J)」 など、専門家として何をすべきかを語っていた。

3) 職場復帰後

半年間の研修で多くの学びと刺激を受けた参加者は、職場復帰後に「行き来する「不安」と「自信」」
 「自身を奮い立たせる」
 「知識が行動を後押しする」
 「専門性の見通しの不確かさ」などの期待される役割と現実の狭間で先駆者としての看護実践を行っていた。

(1) 「行き来する「不安」と「自信」」

ここでは、職場復帰が現実をおびることで、研修中に描いていた認定看護師としての活動を実践することへの不安と思うように活動できない「使命感と不安が交差する」
 「使命感と焦燥感の狭間で」などの揺れ動く心情が語られていた。

①「使命感と不安が交差する」

「看護部長に、(研修から) 帰ったらみんなに知識を伝えて、看護部の脳卒中の看護の向上、技術の向上をしますとか言ってたけど、あんな大きいこと言って私大丈夫かなとか、認定取ったら、地域の患者さん、維持期の患者さんとかそういうとこまで私手を伸ばしていきたい、外来看護とか言っていたけど、私ホント大丈夫やろうか (C)」
 「人前で立ってお話していいのだろうかという不安はいっぱいあります。だけど、伝えたい内容とか、そういうことを私ができる限り伝えたいと思いません (A)」など、研修での学びを還元したいという思いと自分にできるだろうかという交差する思いを語っていた。

②「使命感と焦燥感の狭間で」

「看護の仕事に入ってしまうと、時間に流されているというジレンマは持っていて、それによる不安もあるし、自己嫌悪的な、自分を『もっとやれよ』みたいな思い (A)」
 「認定として帰ってきたのに認定としての働きができていない。『何しているの?』と言われたら、自分でも『何しているの?』と思っています (F)」
 「(認定として) まだまだやることはあるんじゃないかと思っているんですけど、いろんな他の業務、やるが多すぎて、十分に時間が無い。なんか、中途半端なんですね (I)」など、日常の業務に流されて認定看護師としての活動ができない胸の内を語っていた。

(2) 「自身を奮い立たせる」

ここでは、研修を終え、やる気がみなぎった状態で職場復帰したにも関わらず、「認知度の低さを思い知らされる」
 「現実に直面し、自身を奮い立たせるように」
 「使命感が背中を押す」
 「活動を知らしめる」などの先駆者としての苦労や組織的なシ

ステムが不十分な中、「手探りで活動開始」などの認定看護師として周囲に認めてもらうための苦戦の様子が語られた。

①「認知度の低さを思い知らされる」

「他の病棟の師長さんとかに、『別に認定さんに頼まなくてもいいよね。こんな私らでもできるから』みたいなこと言われて、脳卒中の認定の認知度って、結局は知れ渡ってないのかなって (C)」
 「脳卒中リハビリテーション看護認定看護師って知らない人がほとんどで、私の中で99%くらい知らない。患者さんも家族も (B)」と、患者、家族、更には看護師間でも認定の活動が理解されていないことを語っていた。

②「使命感が背中を押す」

「病院に帰って来た時は、みなぎってました。何か色々変えていこうとか、あきらめないぞとか、すごい刺激もされて、帰って来て (B)」
 「研修に行ったら勉強してきた、認定っていう名前も貰った、私はそういうことを実践していかないといけない人だっという認識を持った。私はそれをやっていきたい人だし、やっていかないといけない人だっという認識が背中を押している (A)」など、研修での学びを現場に還元する使命感が語られた。

③「活動を知らしめる」

「患者さんとかご家族にお話しする時でも脳卒中のことを専門的に勉強してきましたのでっていう (G)」
 「認定の活動が、実践・指導・相談ですよっていうのを、まずみんなに提示することから始めた (E)」
 「どうやって活動していこうか、どうやって認定を認知してもらおうか、そこからでしたね。紹介する会をセッティングしてもらって、医師や他部門の人たちにも集まって貰って (I)」など、施設内や患者・家族に自らアピールして存在の認知を図っていた。

④「手探りで活動開始」

「院内の活動をどう進めていったらいいのかということが、全く手探りで、そこら辺に居る [他の] 認定看護師を捉まえて、日々聞いてやっていた (I)」
 「日頃実践していることが、上に分かってもらえない。病棟での活動とか、勤務しながらその合間によそに呼ばれて行っている活動とか、内容とかも上は全然知らないというか、だから報告のすべがないので、それで、月報を付けてみて (I)」などの組織としてのサポートの不十分さを感じていた。

(3) 「知識が行動を後押しする」

研修で身につけた専門的知識は、職場復帰後に

周囲にも認められる程の強みとして、＜言葉に説得性を持つ＞＜研修での学びを活かす＞＜確証を持って提案する＞などの専門的な知識に裏打ちされた看護実践として語られた。

①＜言葉に説得性を持つ＞

「研修から帰ってきてから、知識とか持って帰ってこれるので、多分言っている言葉に説得性があって、ついてきてくれる変化があった (F)」
「周囲から言われたのは、『その分析力すごい』って言われて、すごいって感じで、周りがちょっと変わった (D)」と、研修での学びが力となって周囲に認められたことを語っていた。

②＜研修での学びを活かす＞

「研修で動かす〔離床〕のリスク管理を学んできたので、その辺りをスタッフに伝えていきたいと思っている (G)」
「認定をとって、知識も少し付いた時点で、病棟内の水準も上げたいっていう意欲が出てきて、学習会もしなくちゃいけないと思った。摂食嚥下の委員会を立ち上げて、そんなに行動力もなかったのに、何かをしようと思ったのが認定をとってから (D)」
「看護外来は、外来というより、看護の継続っていうのも認定の研修で習いました。ゴールが退院かって言ったらそうじゃない、やっぱり再発予防っていうことも、それぞれ研修で勉強して (E)」など、研修での様々な学びを臨床現場に提供していた。

③＜確証を持って提案する＞

「日頃の業務でも、これはおかしいなあ～とか、これはもっとこうすべきやなあ～とか、いろんなことに気づけるといいうか、気づいてそれを提案できる。自分で確証を持ってから、ちゃんと調べてから言う (I)」
「ただの業務の流れとかではなくて、今まで培ってきた経験でしゃべるのではなく、ガイドラインでこうこうやし、なぜこの人はこういう体位変換しないとイケないとか、スタッ

フに根拠を持って、一緒にやりながら (C)」
「〔以前は〕自信がないからそこを指摘していいものかどうかっていう、ストップかけている部分もあったところがちょっと踏み込めるようになった。自信を持ってっていう言葉が適切かどうかはわからないんですけど、自分の思ったことは伝えます (A)」など、知識に裏打ちされた自信を持って、提案や発言を行っていた。

(4) 《専門性の見通しの不確かさ》

研修での学びを活かすべく強い思いでの職場復帰ではあったが、役割を継続するうえでの＜役割継続への漠然とした不安＞＜新たな課題が現れる＞などの見通しの不確かさが語られた。

①＜役割継続への漠然とした不安＞

「このまま続けていいのかなとか、思ったりもしてしまいます。漠然とすごく不安に駆られる時があります。認定看護師として、看護部に何か還元できた一つのもので、集大成じゃないけど、何かあったかなって思うと、私このまま居って大丈夫かなって (C)」
「自分の認定としての活動というのを考えた時に、認定で3年経って、これからどうしていこうって考えた時にやっぱり見えなかった (D)」
「今の立場が、宙ぶらりんというか、『そんなにできてないじゃない私』っていう気持ち持たないようにしている、しんどくなるんで (B)」など、先行きの見えない漠然とした不安と共に迷いを語っていた。

②＜新たな課題が現れる＞

「管理とか、研究とか、倫理とかの知識とか技術を求められることが多くて、病態の知識は日々アップしていけるんですけど、そこの知識はどうしても誰からも中々得ることができなくて (F)」
「〔進学理由は〕脳神経全体の看護をより向上させるっていう意味合いで、そういうところを自分としては学習したい (H)」など、認定看護師を継続してい

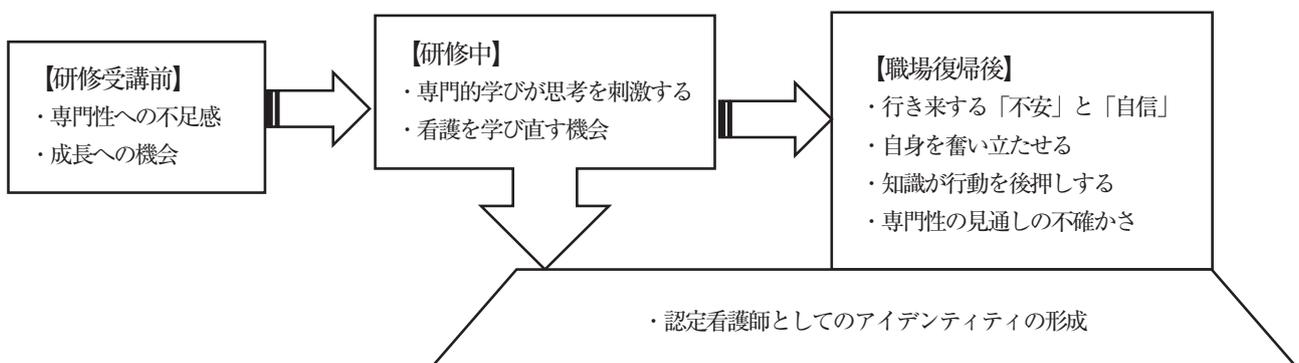


図 認定看護師研修受講におけるキャリア形成の様相

く上での新たな課題について語っていた。

以上のカテゴリ間の関係は、図に示した。「認定看護師としてのアイデンティティ」は、研修中の学びを通して形成され、職場復帰後の土台として位置づけられた。

V. 考察

研修受講におけるキャリア形成の様相

小笠原(2007)は、認定看護師のキャリア形成において「停滞」「看護師のアイデンティティの喪失」「覚醒」「方向性を見出す」時期をニュートラルゾーンとし、その時期を過ごす中で「認定看護師の資格を取得するきっかけ」「変わりたいという動機付け」の転機のプロセスを辿っていると述べていた。本研究においても脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の研修受講に関する語りから見てきたものは、自らの専門性に疑問を持ち始めたり迷いが生じた時期に、職場の上司などの管理者からの勧めで研修受講を決意していた。この時期は、Edger H. Schein (1978/1991)によるところの中期キャリア危機段階、自らのキャリアを再評価する時期でもある。また、認定看護師研修は誰もが受講できるものではなく、職場の推薦などを得て、多くの受講者は身分や給与が保証された休職を利用して、学びの機会を得ていることから、職場の期待を背負った選ばれた看護師である。研修受講の動機が自らのキャリア再評価による「専門性の不足感」に対し、職場の上司からの研修受講の勧めは、疑問を抱き始めた自己評価を覆すものでもあり、参加者は「成長への機会」と捉え、使命感を持っての研修参加であったといえる。このことは、キャリアの節目に自分のキャリアを選択し進んでいく、中堅看護師である参加者のキャリア・トランジション(加藤, 2013)に有効に作用していると考えられ、参加者の研修中の思いからも見出される。研修中の参加者は、専門的な学びに対しても自施設の状況と対比させながら、職場に持ちかえるべき事項を精査するなど、学びを職場で活用するために理論と実践の場を歩き来す「専門的学びが思考を刺激する」体験をしていた。また、一定期間職場から離れて「看護漬けの毎日」の研修であったことから、自身のこれまでの看護実践にも目を向け、内省することで「看護を学び直す機会」を得ていた。しかし、専門的知識を得て、更に内省による自身の内的変化によって再出

発の機会を得た参加者は、研修中に思い描いていた自身の活動を職場復帰後に開始するに当たって、様々な困難さを体験していた。強い使命感のもと実践活動への困難さ「行き来する「不安」と「自信」」を体験しつつも、自らの道を切り拓くべく「自身を奮い立たせる」行動を起こし、研修で得た知識を力に「知識が行動を後押しする」看護実践によって周囲の評価を得ていた。また、役割の変化などによって「専門性の見通しの不確かさ」を感じるなど、揺れる思いを抱えながらも研修で培った確固たる「認定看護師としてのアイデンティティ」を拠り所に精力的に活動していた。

小林(2013)は、認定看護師のキャリア選択について「自分の看護を模索する」「専門分野の知識・技術の獲得をめざす」「周囲の後押しを受けて進む」などを見出し、自分を変えようとする経験の有無がキャリア選択の行動に結びつくとしている。本研究においても研修受講の動機には、同様の様相が垣間見られた。また、前田ら(2018)は、精神科認定看護師(日本精神科看護協会認定)資格取得の動機として「専門性の向上」「精神科看護師としての自己の人生への問い」「職場の改革」「役割遂行の向上」を、資格取得後の経験として「看護実践力の向上」「認定看護師としての役割遂行」「実践におけるジレンマ」「精神科認定看護師への評価の低さ」など、本研究結果と類似する認定看護師の経験を明らかにしている。脳卒中や精神科などの専門領域は、特有の知識や技術を必要としながらも患者の生活全般を看していくことや急性期から維持期までの広範囲の看護を担うなどの共通した看護の特性がそうした類似性を招いているとも考えられる。

吉田ら(2013)は「認定看護師の思考と実践を尊重し、仕事ができる看護師として承認していくことで自己責任の自覚が高まり、認定看護師として適正に評価されることはキャリア発達に重要な意味を持つ」と述べている。参加者の語りの中で、幾度となく出てくる「看護部長」は、認定看護師にとって、研修受講の機会を提供し、新たな専門職としての仕事内容を認めるなどの職場におけるキーパーソンである。認定看護師としてのキャリア形成には、こうした管理職者の積極的な「看護実践の尊重や専門職としての承認」のキャリア支援が必要であるといえる。

VI. 結論

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師が語る認定看護師研修受講におけるキャリア形成の様相には、研修受講前の「専門性の不足」「成長の機会」といった受講動機から、研修中に「専門的な学びが思考を刺激する」「看護を学び直す機会」の体験を経て、「認定看護師としてのアイデンティティの形成」に繋がり、職場の課題や自己の課題を見出し、解決の方策を学び取っていた。職場復帰後は、「行き来する「不安」と「自信」」の中で、「自身を奮い立たせる」ことによって、「知識が行動を後押しする」活動の中、看護実践を通して出現する新たな課題「専門性の見通しの不確かさ」に対峙し、研修で獲得した認定看護師としての知識・技術を拠り所として力強く成長し続ける様相が見られた。

また、認定看護師の能力を最大限に発揮させるには、認定看護師のその時々を思いを尊重し支援するとともにその活動を後押しする看護管理者の存在の重要性が示唆された。

本研究の限界は、認定看護師として活動する中で、研修受講前・研修中の体験を振り返って語っているため時間軸での語りではあっても、その時々を思いを十分に見出しているとは言い難い。しかし、研修受講のインパクトは認定看護師としてのアイデンティティを生みだし、活動の様々な場面で参加者を支持していたと思われる。今後、キャリア支援の視点で考えるのであれば、時間軸の中でその時々を思いを見出すことが必要であると言える。

謝辞

本研究にご参加頂きました脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の皆様、参加者選定にご協力頂きました病院関係者の皆様に深く感謝致します。

尚、本研究は、第46回日本看護研究学会学術集会での報告に加筆した。

本研究は、JSPS科学研究費（JP15K11609）の助成及び千里金蘭大学の研究助成を受けて行ったものである。

文献

- 浅井美千代, 三枝香代子, 白鳥孝子, 佐藤まゆみ, 広瀬由美子, 田口千恵美. (2012). 3年・2年課程卒の中堅看護師が描く今後のキャリアの方向性とキャリア開発に求める支援, 千葉県立保健医療大学紀要, 3(1), 53-59.
- Edger H. Schein. (1978/1991). 二村敏子, 三善勝代 (訳), キャリア・ダイナミクス (pp.31-34). 白桃出版.
- 福地本晴美, 篠木絵里. (2016). 特定機能病院の看護部門における専門看護師・認定看護師の活用システム, 東京医療保健大学紀要, 11(1), 15-24.
- 神坂登世子, 松下年子, 大浦ゆう子. (2010). 認定看護師の活動に関する意識－看護管理者・認定看護師・看護師の比較－, 日本看護研究学会雑誌, 33(4), 73-84.
- 小林有紀. (2013). キャリア・トランジションに結びついた看護師の経験とそのプロセス, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 38, 237-244.
- 加藤さおり. (2013). 中堅看護師のキャリア・トランジションに有効であった看護師長の関わり－認定看護師の教育課程進学時のキャリア・トランジションに焦点をあてて－, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 38, 229-236.
- 厚生労働省. 平成30年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況, Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/dl/gaikyo.pdf>
- 前田由紀子, 立石和子, 谷岸悦子, 松林太朗. (2018). 精神科における認定看護師の資格取得過程と認定後の経験, 西南女学院大学紀要, 22, 11-21.
- 三輪恵理. (2011). 認定看護師のキャリア発達における内的体験, 日本看護研究学会誌, 34(3), 211.
- 三輪恵理, 長光代. (2012). 認定看護師に影響を与えたキャリア発達の体験の意味, 日本看護科学学会学術集会講演集32回, 201.
- 宮首由美子, 亀岡智美. (2012). 認定看護師の活動継続意思の現状と活動状況との関係, 国立看護大学校研究紀要, 11(1), 1-9.
- 日本看護協会. 認定看護師登録者一覧, <https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn#approvedpersons> (検索日2020年12月7日)

- 日本看護協会. 認定看護師の役割, <https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn> (検索日2020年12月7日)
- 西村紀子, 窪田好恵, 米田照美, 伊丹君和. (2018). 認定看護師のキャリア発達に関する文献検討 (医学中央雑誌から), 人間看護学研究, 16, 41-47.
- 小笠原恵子. (2007). 認定看護師のキャリア形成における転機のプロセス —ニュートラルゾーンに焦点を当てて—, 高知医療センター医学雑誌, 2(1), 21-33.
- 鈴江智恵. (2018). 認定看護師が役割を獲得するまでのプロセスに関する研究, 実践政策学, 4(2), 159-168.
- 吉田初美, 森田敏子. (2013). 認定看護師のキャリア発達への影響要因と人材育成, 応用心理学研究, 39(1), 13-18.